

“広田っ子”の笑顔 今年も銀盤に咲く

3月で大震災6年

被災地支援続ける「奥州♡絆の会」 新たな関わり 模索

仮設住宅で校庭が使えない子どもたちに、存分に体を動かしてもらおう。陸前高田市立広田小学校の児童を招き、奥州市の市民組織「奥州♡絆の会」（渡辺明美会長）による支援企画「雪と氷であそぼう！」が、7日から2日間の日程で金ケ崎町の県南青少年の家とみどりの郷アイスアリーナを会場に実施されている。同小児童23人が参加し、スケートを満喫するとともに、同会メンバーらとの交流も深めている。東日本大震災からもうすぐ6年を迎えるのを契機に、同会は新たな被災地との関わり方を模索し始めている。（菊池藍）



同地区への支援活動を続けている同会が、子どもたちに伸び伸びと体を動かしてほしいと企画し、6回目を迎えた。校庭に仮設住宅が立ち並び、体育は体育館、運動会は中学校の校庭という環境の中で暮らす児童に、運動活動の機会を提供しようとして、11（平成23）年7月に前沢区の前沢いきいきスポーツランド

で実施した「広田小・スパー体育デー」を皮切りに、12年1月からは冬休みを活用したスケート交流を続けて

いる。今回も1泊2日の日程。奥州市の協力でバスによる送迎を行い、国の震災復興関連補助金を一部活用している。初日は、県南青少年の家で昼食後、アイスアリーナでインストラクターの指導を受けながら、スケートを

楽しんだ。「5回目の参加という6年の菅野夏生君（12）は「生活は震災前と変わらないうが、小学校の校庭で運動会ができないまま卒業する。校庭で思いつき走り回ってみたい」と話す。「前は参加できなかったが、みんなとも仲良くなれて楽しいので、参加している」と同会の活動を楽しみにしてきた様子で、友人らと氷の感触を楽しんでいた。渡辺会長（68）は「学校の協力で続けることができ、半数以上が複数回参加してくれている」と子どもたちの様

子に目を細め、「スケートも上手になったが、それだけではなく、青少年の家での規律にそった生活や互いに声を掛け合う様子など、生活面での成長が見られるようになったのがうれしい」とほほ笑む。

声を掛けてもらえるまでになっており、それが継続するとうことなんだと感じている」と話し、「見違えるほど復旧復興が進み手を引くこともできるが、何かしらの形で引き続き関わっていききたい」と、活動の新たな展開方法を思案している。

スケートを楽しむ陸前高田市立広田小学校の児童たち